

雌阿寒岳

1 概況

ポンマチネシリ山頂の赤沼火口及び北西側斜面の噴煙活動は、3月21日の噴火直後に比べ低下傾向にあるものの、活発な状態が続いています。地震活動は低調な状態が続いており、火山性微動も観測されませんでした。火山活動は全体として低下してきていますが、依然活発な状態ですので、山頂火口近傍及び北西側斜面では注意が必要です。

火山情報の発表状況（2006年4月）

発表日時	情報番号	内容
3日16時00分	火山観測情報第21号	活発な火山活動継続、その後の状況
7日15時40分	火山観測情報第22号	活発な火山活動継続、その後の状況
10日16時00分	火山観測情報第23号	活発な火山活動継続、その後の状況
17日16時00分	火山観測情報第24号	活発な火山活動継続、その後の状況、10日から12日に行った山麓からの観測結果および11日に北海道大学が行った上空からの観測結果
24日16時00分	火山観測情報第25号	活発な火山活動継続、その後の状況

2 地震および微動の発生状況

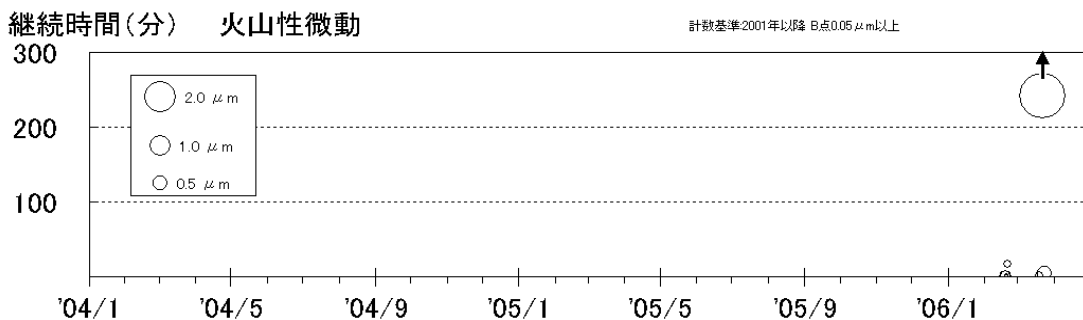
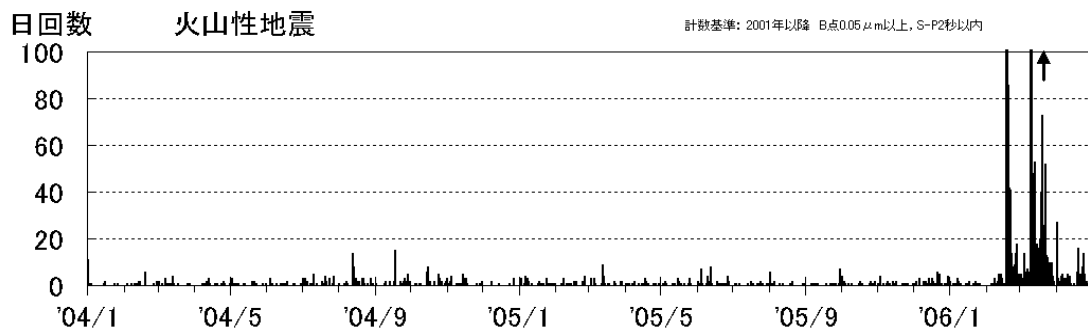
地震活動は低調に経過しました。火山性地震は3月21日の噴火後数日間はやや多い状態が続いていましたが、その後は減少し4月2日にややまとまって発生した（27回）ほかは、1日あたり概ね10回以下で推移しました。震源は主にポンマチネシリ火口直下の海面付近に分布していると推定されます。

火山性微動は3月24日以降、観測されていません。

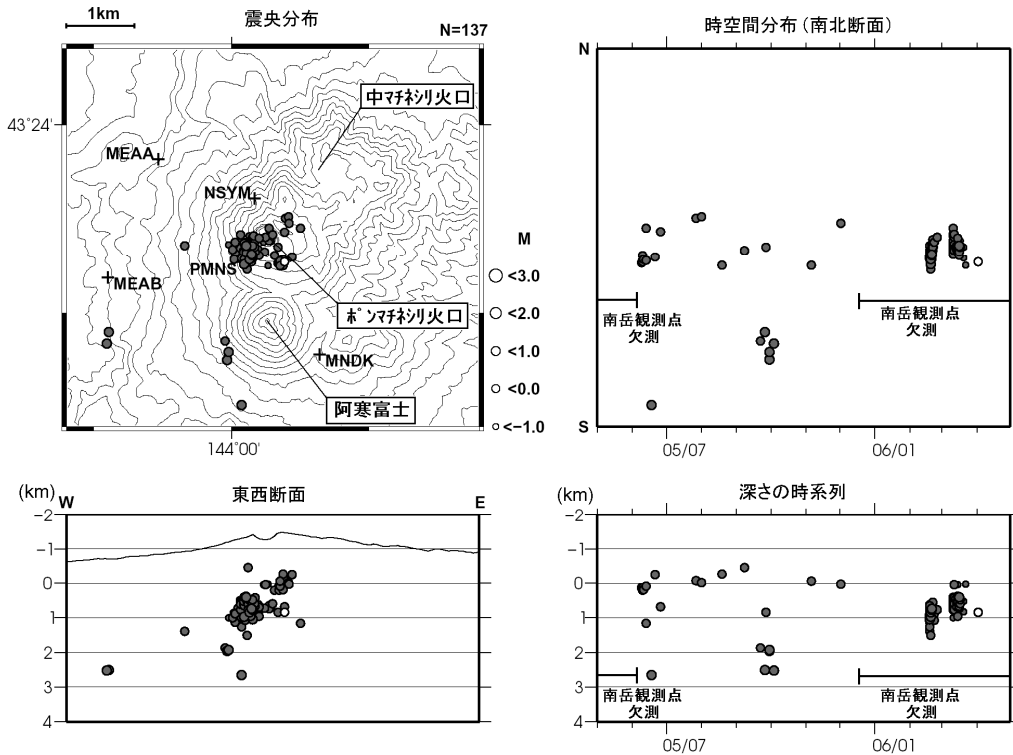
地震・微動の月回数（B点）

2005～2006年	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
地震回数	20	40	14	16	18	22	20	44	22	1129	1183	128
微動回数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	4	0

※地震回数は暫定値です。後日変更される場合があります。



最近の地震および微動の発生状況（2004年1月～2006年4月） ↑印は噴火



雌阿寒岳の震源分布図 (丸印：震源、+印：地震観測点)

○印は今期間(2006年4月)に求めた震源を示しています。

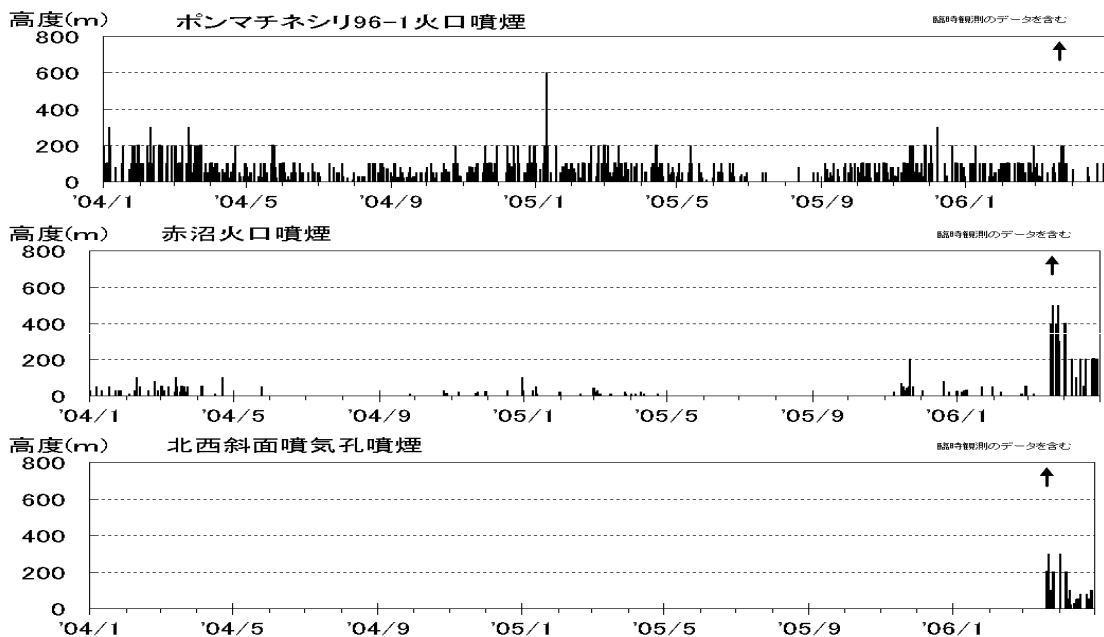
●印は前期間までの11ヶ月間(2005年5月~2006年3月)に求めた震源を示しています。

雌阿寒岳で発生した地震の多くは、ポンマチネシリ火口直下の海面付近に分布しています。なお、噴火前の2月18日の地震増加以降に求めた震源の多くは、同火口直下の海面下1km付近に集中し、3月11~12日の地震増加にかけて震源がさらに浅くなる傾向がみられました。

※2005年12月11日以降、南岳観測点障害のため震源決定能力が低下しています。2月18日以降の震源については精度の悪いものも含めているため、後日変更される場合があります。

3 噴煙の状況

ポンマチネシリ山頂の赤沼火口及び北西側斜面の噴煙活動は、依然活発な状態が続いており、噴煙の高さは火口縁上概ね100~200mで推移しました。ポンマチネシリ96-1火口の噴煙の状況は噴火前と変わらず、噴煙の高さは火口縁上概ね100mで推移しました。



最近の噴煙の状況 (2004年1月~2006年4月)

↑印は噴火

4 上空からの観測結果

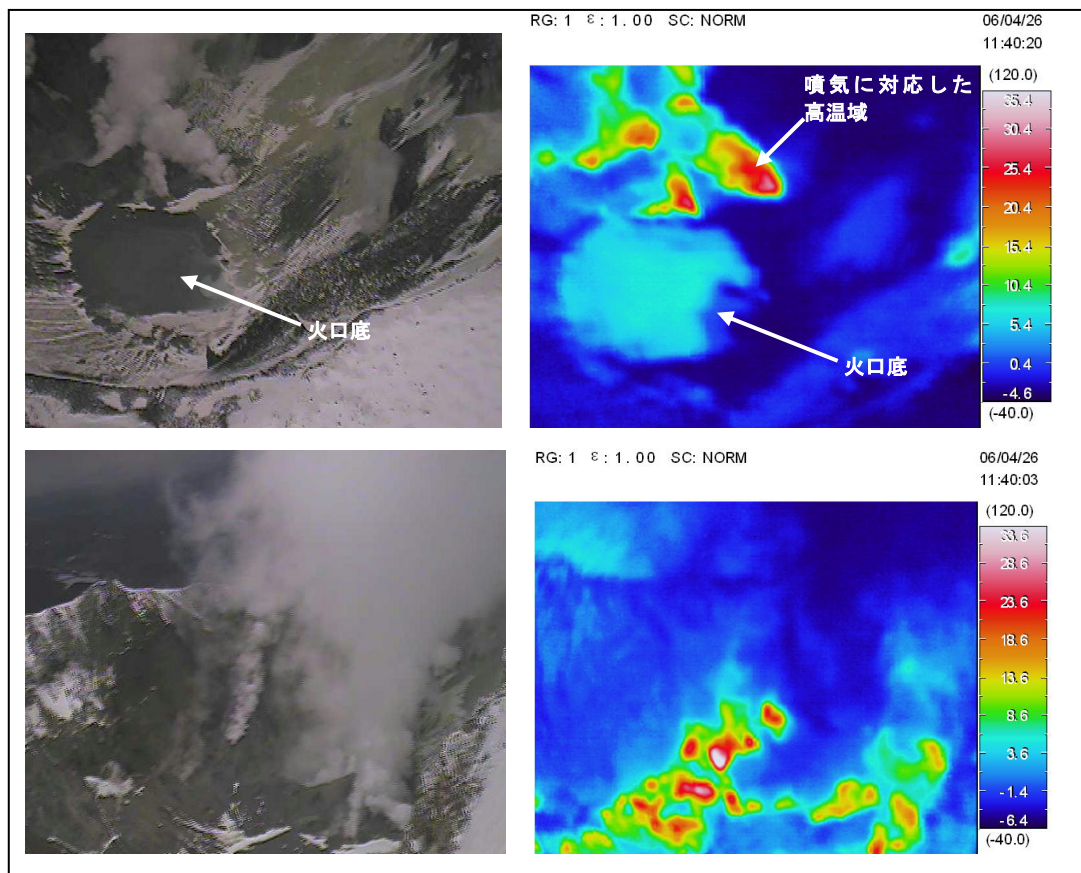
26 日に北海道の協力を得て行った上空からの観測では、赤沼火口の噴煙活動は噴火直後に比べ低下傾向にあるものの、火口底北西部の複数の箇所から白色の噴煙が比較的強い勢いで噴出していました。これらを含め火口底には噴出域や地熱域が環状に点在していました。11日に北海道大学が行った調査結果と比べ熱活動等の状況には特段の変化は認められませんでした。また、火口周辺には新たな噴出物は認められませんでした。山頂の北西側斜面の噴気孔群の上部で依然活発な噴気活動を確認しましたが、下部の噴気孔の噴気活動は衰退した状態でした。その他、ポンマチネシリ96-1火口や中マチネシリ火口では、火口の形状や噴煙活動に変化はありませんでした。



赤沼火口の噴火前後の比較

左：平成 18 年 3 月 17 日 右：平成 18 年 4 月 26 日 (いずれも南東側上空から撮影)

赤沼火口の火口底北西部には、複数の噴出域が認められます。噴火前の3月17日の観測ではこの部分に熱的な兆候は特に認められていません。



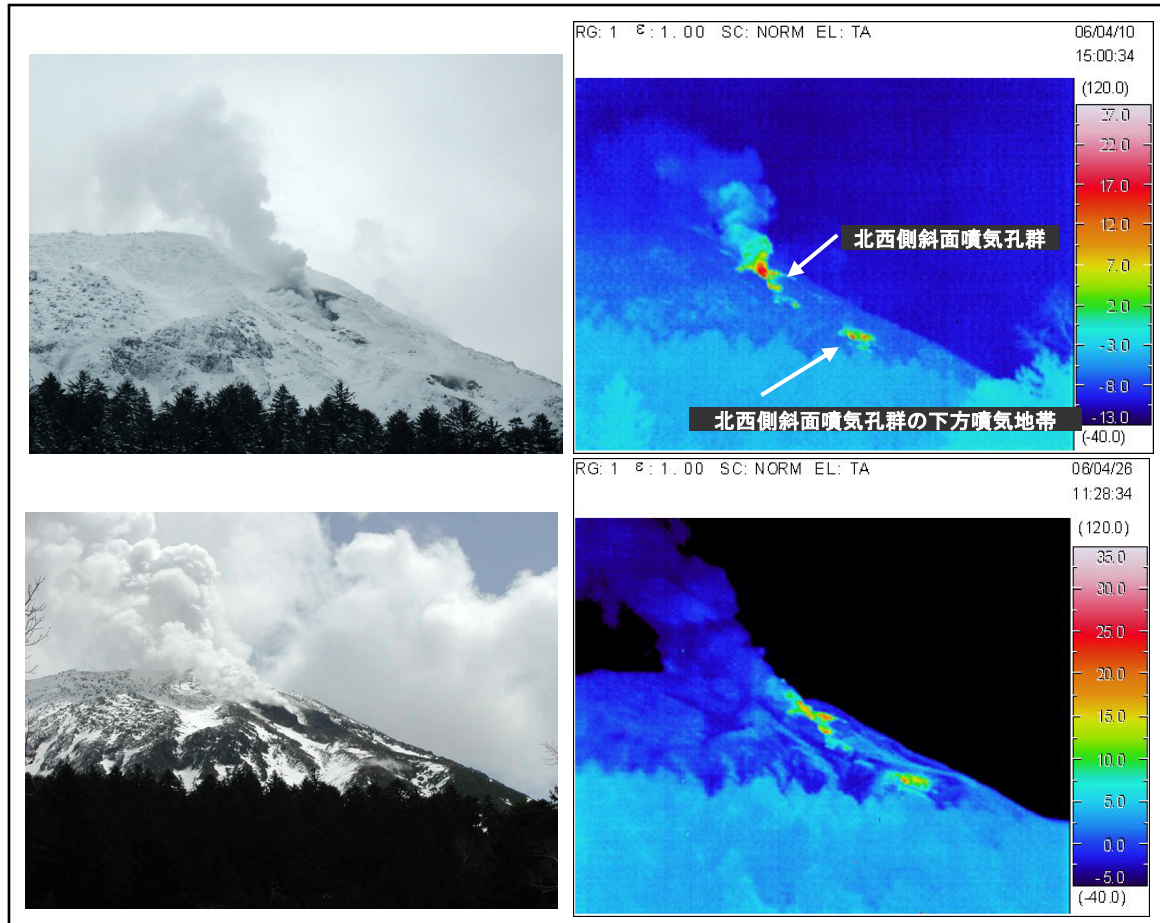
赤外熱映像装置*による赤沼火口内の表面温度分布 (4 月 26 日)

上段：南側上空から撮影 下段：東側上空から撮影

火口底には噴出域や地熱域が環状に点在しており、これらに対応して高温域が認められました。

5 山麓からの観測結果

10～12日及び26日に実施した山麓からの赤外熱映像装置※による観測では、北西斜面の噴気孔群の噴気および地熱域に対応した高温領域が認められましたが、その状況に特に変化は認められず、新たな高温領域も観測されませんでした。また、11日に山麓で実施した火山ガス（二酸化硫黄）の放出量測定では、二酸化硫黄は検出されませんでした。



赤外熱映像装置※による山頂北西側斜面の表面温度分布

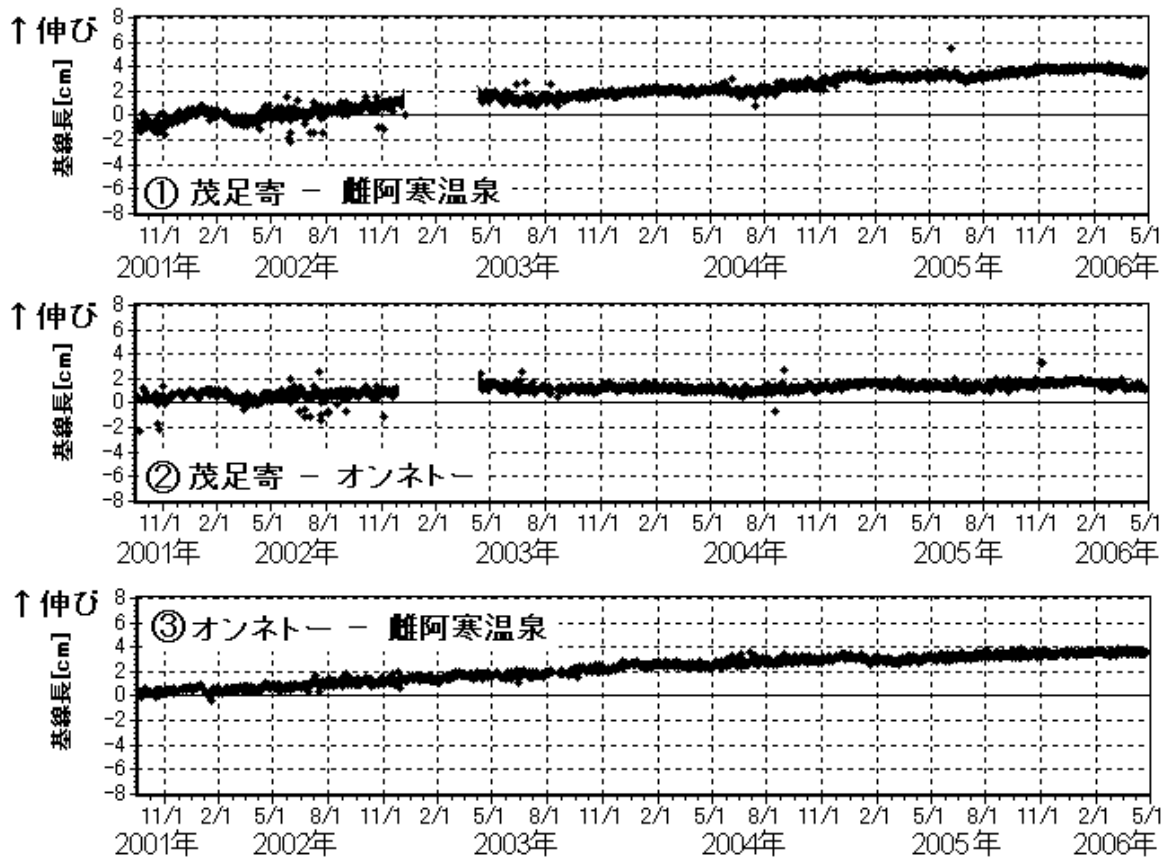
上段（4月10日撮影） 下段（4月26日：釧路地方気象台撮影）

噴気箇所や地熱域に対応した高温領域が見られますが、その状況に変化は認められません。

※赤外熱映像装置は、物体が放射する赤外線を検知して温度や温度分布を測定する計器です。熱源から離れた場所から測定できる利点がありますが、熱源から離れるほど測定される温度は実際の温度よりも低い値になってしまいます。また、噴煙や霧で測定対象が見えにくい場合には温度測定ができないこともあります。

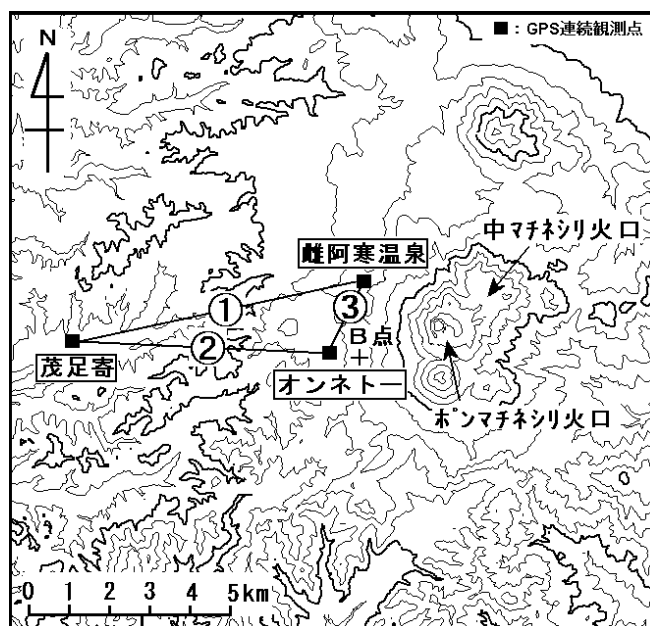
6 地殻変動の状況

GPS 連続観測では、火山活動に関連すると考えられる変動は観測されませんでした。

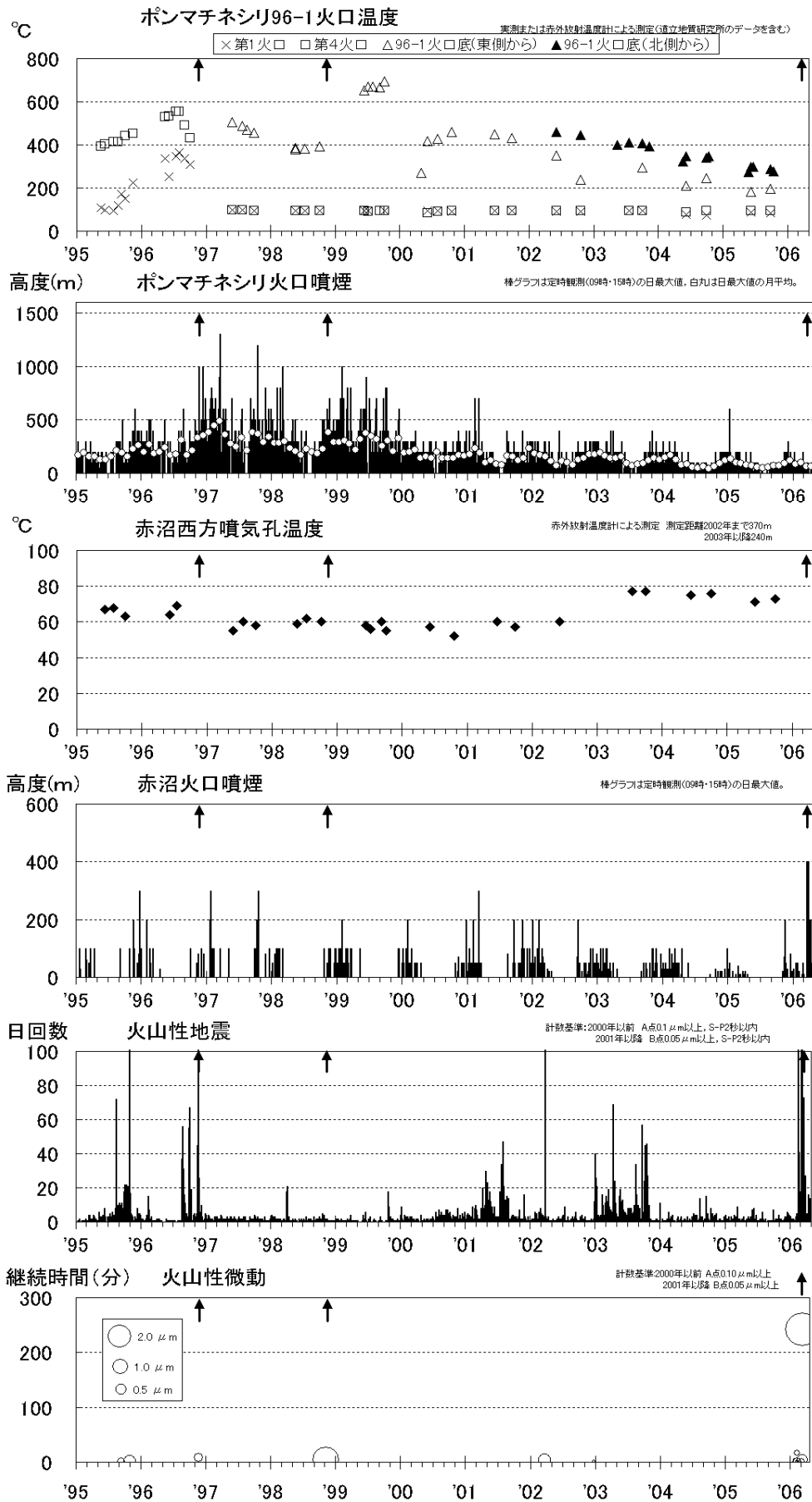


基線長変化（2001年9月19日～2006年4月30日）

基線長変化グラフの空白部分は欠測



GPS 観測点配置図



近年の火山活動経過図 (1995 年 1 月 1 日～2006 年 4 月 30 日) ↑印は噴火